

直江兼続と庄内

1月11日'09 12:30 集合 NHK 鶴岡支局

@ 朝日連峰との関わり

高等学校で山岳部に入ったのが全ての始まり。そして、高校の山岳部卒業の有志で社会人山岳会を組織していたので、個性的な多くの OB さんに巡り会えた。

このような環境に恵まれ、数ヶ月で休日の度に山に行くようになっていた。

特に、高校3年のゴールデンウィークに、学校を4日休んで連休にしてOBさん達と大井沢マダの熊狩りに参加させてもらった後に、朝日連峰を縦走したのが強く印象に残っている。朝日軍道を知ったのもこの頃。

山にばかり行っていることに対して、親の反対意見が強まってくるのを感じるようになった。

それで、「山」を調査、研究の場にすればよいことに気付き、「朝日山地の地形」を卒業論文のテーマにした。

この頃に、山形県総合学術調査で朝日連峰が取り上げられ、地理班の末席に加えてもらい、朝日軍道調査の渡辺先生や地形の米地先生にお供をさせてもらった。

(報告書が展示されています。昔の名前で出ています)

@ 朝日軍道踏査

庄内日報 11/25'08 佐々木勝夫氏と学術調査報告書の渡辺先生の資料

1600年、関が原の戦いで石田三成が徳川家康に破れた時、山形の最上義光と戦っていた直江兼続も撤退。直江軍に付いていた酒田の武将・志駄義秀が軍道を3回(2回目:11月下旬から12月初め、3回目 3/24)通っている。酒田から米沢に最後に向ったのが、**慶長6年、1601年3月24日とある**。道案内を努めた庄内の足軽20人も志田の後を追って、家族と共に長井へと移った。

それから376年後の1977年、ほぼ同じコースを、時期に仲間4人(西俊雄、五十嵐勝彦、三浦良夫)で、旧朝日村の鱒淵から登ったことがあった。

軍道を登ることを突然思いついた訳ではなくて、伏線があった。

1971(高校の山岳部の後輩 2 人)と 1973 年(高校の山岳部後輩と教え子 4 人)の年末年始に、山形側から大朝日岳に 2 回登っていたので、今度は庄内側からの登り口をあれこれ考えていた。

(この時の写真が展示場に展示、資料によると酒田の武将志駄義秀による直江の軍勢が通ったのが、11 月末～12 月上旬となっているから、写真と同じような時期に通った。主稜線は強風が吹荒れるので雪が積もりにくく、夏道が解かる)

今日の庄内側の登山コースは、大鳥集落から泡滝ダム、大鳥池から以東岳で主稜線に出るので、庄内側の軍道(佐藤栄太氏の「慶長年間の朝日連峰通路について」による)は、忘れ去られて完全に藪に埋もれている。

でも、軍道は尾根伝いに切られているので、積雪期なら登れると思っていた。

積雪期に庄内側から登るには、泡滝ダム手前で尾根に取り付き、茶畑山に登るコースが使われているが、意識の中にずーとあった「朝日軍道」を辿ってみようということになった。

茶畑山に登るよりは、なだらかだが、遥かに長く、複雑な地形のコースになるが、何かロマンが感じていた。

要するに、軍道を辿るのが目的というよりは、庄内側から積雪期に登る長大な尾根コースとして選択した。

上杉軍(酒田の武将・志駄義秀)が、朝日軍道を通って庄内から撤退してから 376 年後、1977 年 3 月 31 日、39 年ぶりの大雪(当時の記録)に見舞われた鱒淵から登り始めた。(当時 39 歳)

八久和への車窓から見える長慶ノ滝の上から尾根に取り付き、鱒淵山から登り始めたが、霧と濡れ雪、強風に悩まされ続けた。地図とコンパスを頼りに、時折切れる霧の中でコースを確認しながらの登山だった。今のように GPS(カーナビ)なんか無かった。

2 度 3 度とコースを誤りながら、4 日目の朝、漸く茶畑山(1377m)に通過。

そして、戸立山(1552m)が近づくにつれて風が一段と強まり、足もとの雪が硬く凍り始めた。朝日連峰の標高 1500m は、年末年始でもラッセルからは解放されるが、気持が引き締まる標高である。

そして、夏の登山コースとなっている三角峰(1520m)に来た時、朝日軍道を登っているという意識がすーと消えて、早春の朝日連峰登山に気持が切り替わり、強風と凍った足元の雪に身構えていたのを思い出す。

そして、以東岳、狐穴、寒江山、竜門山の主稜線を通って、清太岩山経由で大井沢に下山した。

この時の記録が、20 年近く前の「岳人」(557 号)、特集”歴史の峠路を訪ねて”に「戦国時代の古道・朝日軍道を行く」のタイトルで収録されている。

(展示会場にポスターが展示されています)

従って、季節は違うが山田さんたちのコースと、竜門山⇄戸立山が重なっており、軍道の全行程を辿ったことになる。

30 数年前の山登りが、このような形で陽の目を見るようになるとは夢々思ってもみなかった。

登山途中、無意識のうちに軍道の痕跡、ブナの樹木への彫りものなどを探している時もあったが、当然何も見つからなかった。

寝袋にもぐると、400 年ほど前の戦国時代の軍道、敗残兵による 12 月上旬の山越えなどなどの断片的な知識で、勝手に思いを巡らせながら、想像、空想の世界で遊んでいる自分に気付いた。

どんな服装で冬の山越えをしたのだろうか、武将はまだしも奥方が歩く時はムロやゴザの上を歩かせたのだろうか、雪山を馬で越える時は裾野で食い溜めさせ翌日一気に山越えできるところで餌なしで夜を過ごしたのか(パツヤブヒマヤの峠を越える羊)、マギを山案内人として雇っていたのだろうか、どんな所に寝泊りしていたのか、山で寝るときはカシとカマの毛皮を敷いたのかな(ラップランドに氷の跡があるが、氷のベッドにカシの毛皮が敷かれていた)、などなど。

こんなことを考えていると次第に、綿入れを着て、毛布のような布を被り、
がけの毛皮の手袋に靴を履き、寝倉では熊の油で灯りを取って、凍りついた
塩鮭入りのおにぎりをかじりながらの山越えだったのかな?!と勝手に想像し
てしまう。

歴史の専門家は、年代と事実をパズルのように合わせることに喜びを覚えるの
かなと思うが、素人はわずかな知識を可能な限り膨らませて、時代を飛び越
えて想像の世界で自由に遊べるのが特権だと思う。

◎ 日本に残る他の山岳軍用道路

- ・ 甲斐の武田 信玄による、信州→飛騨に抜ける「安房峠」(1822m)(長野と岐
阜の県境) 飛騨を攻める時に利用、塩ルート。 現在、高速道路
 - ・ 甲斐の武田 信玄による、北信州を侵攻するときに通った「大門峠」(1442m)
- ・ 越中の佐々 成政による、越中→信州に抜ける「ザラ峠」(2348m)(富山県)と
「針ノ木峠」(2770m)(富山と長野の県境) 徳川に援軍依頼に利用 現在、北
アルプスのダイヤモンドコース、室堂→ザラ峠→五色が原 古ぼけた道標が建つのみだ
が、かなりの登山者が”あのザラ峠だ”と声をあげる。針ノ木峠は、針の木雪
渓での山スキー

これらは、山仲間だけでなく、歴史的にもかなり知られているのに、朝日
軍道は?となると、「幻」の形容詞が付くほど知られていないのは何故だろ
うか。軍用道路だったから公にしなかったということもあると思うが、それ
だけでもないような気がする。政治的な匂いがしないでもないのが…。

しかも、安房峠やザラ峠は、「峠」を越えているのに対して、朝日軍道の
標高は低いが主稜線に延々と切られた道路で、他のものに比べて決して見劣
りしないばかりか、特異なものと言える。

道路そのものの保存は到底無理だが、何らかの形で後世に残すべき歴史的
貴重な財産だと思う。

例えば、地元の観光地図に記す、道標を建てる、歴史教育、展示場の展示
物の活用などなど、いろいろ考えられる。

一昨年、南米最高峰アコンカグア裾野の町、メドレーサで見かけた紙芝居式で、祭り
の時などにさり気無く街角に設置するのも1つのヒントになるのかな?!と思い、
写真をもってきた。